JSMMR
JAPAN SOCIETY FOR MIXED METHODS RESEARCH
日本混合研究法学会　ニュースレター
http://www.jsmmr.org/
2015.12
第1号

ニュースレター第1号の発行に寄せて

日本混合研究法学会理事長
抱井　尚子

本年９月に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されました国際混合研究法学会（MMIRA）アジア地域会議/日本混合研究法学会第１回年次大会開催から、早いもので既に三ヶ月が経ちました。大会テーマが「混合研究法への誘い～学の境界を越えて」でしたが、お陰さまで、学の領域のみならず、国籍、文化、言語の境界を越えて、国内外より300名を超える方々にご参加いただきました。皆さまに、改めて御礼を申し上げます。

本学会も、日本初の混合研究法に関する学会として、本格的に活動を開始して行きたいと思っております。その第一弾として、今回はニュースレター第１号をお届けしたいと思います。ニュースレターの発行やメールによるご案内を通して、これからも皆さまにお役に立つ情報を配信して行きたいと思っております。会員の皆さまも、他の学会員の方々と共有したい情報がございましたら、積極的に事務局の方にお寄せ下さい。

日本混合研究法学会は、産声をあげたばかりの新しい学会です。会員の皆さまの異なる専門領域や、混合研究法に対するさまざまなお考えを尊重し、多様性をバネに未来に向けて発展して行くことができる学会を、皆さまとともに育んでいきたいと願います。どうぞ、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

2015年度国際混合研究法学会アジア地域会議 日本混合研究法学会第1回年次大会総括

実行委員長　稲葉　光行

2015年9月19日-20日に、立命館大学大阪いばらきキャンパスを会場として、国際混合研究法学会(MMIRA)アジア地域会議および日本混合研究学会(JSMMR)第１回年次大会が開催されました。本大会は当初仙台で開催される予定でしたが、他のコンサート日程との関係から急遽会場が変更になり、その件は新聞等でも話題になりました。

新会場となったキャンパスは、2015年４月に「アジアのゲートウェイ」というテーマのもと開学したばかりであり、結果としてこの大会は、キャンパスの開学趣旨にもふさわしい学術集会となりました。本大会は最終的に、国内外から341人（海外招聘者・事務局を含む）が集まる大イベントとなりました。大会の中では、特別・基調講演6件、パネル討論2件、ワークショップ6件、口頭発表36件、ポスター発表28件、出版社・企業展示6件があり、さらにJ.クレスウェル教授を含む国際的に著名な研究者が5室に分かれて参加者と意見交換を行う「meet the experts」セッションが行われるなど、日本とアジア地域の混合研究法学会のスタートアップにふさわしい企画も盛り込まれました。

大会の中では、MMIRAを設立し牽引している著名な研究者らに加え、混合研究法の領域で豊富な実績を持つ国内外の著名な研究者や若手参加者らが集まり、高いレベルの発表と活発な議論が行われました。人数においても活発さにおいても、昨年度MMIRAが主催した世界大会に近いレベルの集会であったのではないかと考えております。大会で収集したアンケートでも、「スタンディング・オベーションで終わる学会にはじめて参加した」、「アットホームな学会だった」、「会場が広々としてよかった」など、多くの好意的なコメントをいただきました。第１回大会としては大盛況であったと思っております。

最後に、今大会で講演・発表をされた方々、議論に積極的に参加された方々、そして企画・査読・広報・運営において大変献身的なご助力を頂いた実行委員の先生方、さらに長時間に渡って大会を支えた事務局の皆様に、改めて深く御礼を申し上げます。今後私自身としては、今回の大会で参加者の皆様から頂いた学術的な刺激や、実行委員の先生方から頂いたご助力に対する恩返しのつもりで、学会活動における情報交流やセミナーを通じて、この新しく生まれた学術コミュニティの発展にささやかながら貢献をさせていただければと思っております。

2015年度国際混合研究法学会アジア地域会議
日本混合研究法学会第1回年次大会

ワークシップ1　参加報告

ワークシップ1：　Introduction to MMR
（混合研究法入門）

講師：　R. バーク ジョンソン（南アラバマ大学）
マイク D. フェターズ（ミシガン大学）

文献や論文を通して専門用語などの断片的な知識はあったものの、座学でMMRを学んだ経験がなかったので、初心者向けの「混合研究法入門」のワークショップを受講した。南アラバマ大学のバーク・ジョンソン先生、そしてミシガン大学のマイク・フェッターズ先生のお二人によるバイリンガルのワークショップでは、３時間の長丁場であることを忘れさせるぐらい、ステップ・バイ・ステップで参加者が各々の研究課題と向き合えるように構成されていた。

手法（メソッド）、方法論（メソドロジー）、パラダイムに始まり、質的研究と量的研究の特徴やデータの種類など、MMRの基礎についての講義があった。次にデータの統合の話に進むかと思いきや、パワーポイントに書かれている「さあ、あなたの番です」に促され、受講者は【ポスター】と書かれたワークシートに各自の研究課題と必要とされるデータの種類を記入した。そこで講義に戻るのではなく、同じテーブルで二人組になって、お互いに研究課題を共有すると、それまでの緊張感も少しほぐれた。

このようにしてワークショップのレジュメの項目の講義をひとつ終えては、自分の研究課題に置き換え、ワークシートに記入、それを相手に共有する流れの繰り返しであった。講義内容もなぜ質的データと量的データの両方を必要とする理由、データソースの種類、リサーチデザイン（説明的、探究的、収斂的）、サンプリングの種類、データの変換（量的データの質化、質的データの量化）など多岐にわたる。また最後の項目では、受講者が各々の分野において投稿するジャーナル名を採択率が高い順に３冊あげて記入した。こうすることで、単に研究で終わらせるのではなく、ジャーナル投稿に結び付けて、受講者が研究に対するインセンティブを高く持てるように配慮されていた。必ず段階的にワークシートの記入に続いて相手と共有することにより、それまで曖昧だった部分に気づかされ、また足りない部分を再認識したのは私だけではないと考える。

報告者：
武田　礼子
国際基督教大学大学院
アーツ・サイエンス研究科
言語教育（英語）専攻　博士課程

ワークシップ1　参加報告

ワークシップ1：　Introduction to MMR
（混合研究法入門）

講師：　R. バーク ジョンソン（南アラバマ大学）
マイク D. フェターズ（ミシガン大学）

「WORK, WORK, WORK!! This is a workshop!! みなさんには３時間、しっかり働いてもらいますよ」。開口一番、マイク・フェターズ先生は参加者全員の意識の統一を図った。Workshop1では、混合研究法に取り組もうとする研究者が身につけておくべき研究の進め方を体系的に学ぶことができる。８つのステップを１つずつ、まさにWORKすることによって充実した３時間を過ごすことができる内容である。８つのステップ（（１）混合研究法を用いるのが適当かの判断、（２）混合研究デザインを用いる根拠の見極め、（３）混合研究法デザインおよびサンプリングのデザインの選択、（４）データ収集、（５）データ分析、（６）データの妥当性の継続的な検証、（７）データと結果の継続的な解釈、（８）研究報告書作成）は、参加者が事前に考えてきた各自のリサーチ・クエスション（以下、RQとする）を基盤として、つねにRQとの関連性を考えながら進めていく。各ステップには、バーク・ジョンソン先生のわかりやすい解説がついてくるので、躊躇無く進めることができる。二人一組になって、ステップごとにお互いの研究のプレゼンテーション（以下、プレゼン）を行う。休みもそこそこに、二時間半が過ぎる。最後は、ポスターセッションといって、学術集会さながらのプレゼンの時間が設けられていた。

わたし自身は混合研究法の説明的デザインを用いた調査をすでに行っており、いわば経験者という立場でWorkshopに参加していた。そのため、今回のWorkshopで新たな学びがどのくらい期待できるのかについて、疑問に思っていた部分が参加する前には少なからずあった。しかし、改めて８つのステップをもとに自身の研究について体系的に見直すことができ大変勉強になったと同時に、自信も生まれてきたように感じられた。それは、研究を客観的にみるという作業、特にポスターセッションという体験の効果も大きかったのではないだろうか。

あっという間に３時間が過ぎ、Workshopの終了がフェターズ先生、ジョンソン先生の両氏から伝えられる。参加者全員がハードワークを行い、伝えることを通して学びあった高揚感に包まれていた。そして、わたし自身はといえば、本Workshopへの参加を通してしか得られなかったであろう、混合研究法を学びあう「仲間」が得られた喜びを感じていた。次回の学術集会でもこのようなWorkshopがあることを期待している。

報告者：
阪井　万裕
東京大学大学院医学系研究科　健康科学･看護学専攻
地域看護学分野　博士課程
日本学術振興会特別研究員

ワークシップ2　参加報告

ワークシップ2：　State-of-the-Art Developments in Mixed Methods Research Designs（最先端の混合研究法デザイン）

講師：　ジョン W. クレスウェル（ミシガン大学）
ベンジャミン　F. クラブトリー（ラットガース大学ロバート・ウッド・ジョンソンメディカルスクール）

「混合研究法の最先端：あなたの混合研究法プロジェクトをデザインするために（State-of-the-Art Mixed Methods: Designing Your Mixed Methods Study）」と題されたワークショップ2は，クレスウェル先生とクラブトリー先生によって行われました。

ワークショップの本題へ入るのに先立って，まずは両先生，そして参加者の自己紹介が行われました。クレスウェル先生は，富士山の麓に5ヶ月ほど滞在していたときのことについて，クラブトリー先生は，広島の大学で教鞭をとられていたときのことについてなど，日本とのつながりを中心にお話をされていました。参加者は30名ほどで，日本だけでなく，海外からも，幅広い学問分野を背景にもつ多くの教員や大学院生などが集まっていました。

さて，ワークショップは，各参加者が混合研究法を用いた研究をデザインできるようになることを目的に，レクチャーとワークシートをもとに進められました。また，参加者には当日までに，あらかじめ，「題材となる自身の研究プロジェクトを簡潔にまとめてくるように」との指示がなされていたため，本ワークショップが終わる頃には，混合研究法を用いた研究プロジェクトのデザインがひとつ出来上がる，という仕掛けにもなっていました。

ワークショップの具体的な内容としましては，研究をデザインするプロセスが9つのステップに分けられ，それぞれのステップに関して，講師からの説明，ワークシートへの記入という順序で進められました。さらには，二人一組でペアを組み，それぞれ自分の研究デザインを相手に説明してフィードバックを得るような試みも行われました。ワークシートやペアワークの際には，クレスウェル先生，クラブトリー先生がそれぞれ教室を巡回し，個別にコメントをしたり，質問に答えていたりしていました。経験豊富な両先生による指導，および参加者の積極的な取り組みによって，当該ワークショップは大盛況のうちに幕を閉じました。

ステップ1「混合研究法を予示するタイトルを考察する（Create a draft title that foreshadows mixed methods）」
ステップ2「あなたの研究の前後関係，背景及び問題を説明する（Describe your research context, background, and problem for your study）」
ステップ3「あなたの研究目的を説明する（Describe your study aim）」
ステップ4「量的と質的リサーチクエスチョンを明確にする（Identify your quantitative and qualitative research questions）」
ステップ5「あなたが収集・分析するデータのタイプを述べる（State the forms of data will you collect and analyze）」
ステップ6「どのように両タイプのデータを分析するかを明確にする（Indicate how you will analyze both types of data）」
ステップ7「あなたが量的及び質的データを統合または混合する理由を述べる（Give a reason for why you are combining or mixing quantitative and qualitative data）」
ステップ8「二つのデータベースをどのように『統合』または混合させるかを明確にする（Indicate how will you “integrate” or combine the two databases）」
ステップ9「あなたの混合研究デザインを明確にし，略図を描く（Identify your type of mixed methods design and draw a diagram of it）」

報告者：
横内　陳正
東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻　博士課程
建設マネジメント/開発システム研究室

ワークシップ3　参加報告

ワークシップ3：混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ

講師：稲葉 光行（立命館大学）
抱井 尚子（青山学院大学）

本ワークショップは，「グラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ」（GTMA）の①概要と②フリーソフトウェアを用いた具体的なデータ分析の手続きの紹介という2部構成。約50名の参加者は，「質派」と「量派」が半々，混合研究法（MMR）の経験者はごくわずかであった。

第1部のオープニングは，抱井先生のアメリカ“MM”ストーリー，「研究法を学ぶ時，自分の哲学的な問いからアプローチが決まる」と博士課程のエピソードから始まった。がん研究を通して出会った混合研究法，そのMMアプローチを用いた博士論文執筆，現在に至るストーリーには，MMRの日進月歩が重なり，概論の入口に立つことができた。

そして，「GTMAが依拠する質的研究主導型MMR／ＭＭＭＲ（Multimethod and Mixed Methods Research）」のレクチャーへと進む。まず、抱井先生の師であるCreswell先生の理論を中心にした混合研究法の重要な前提やMMRデザインの基本，混合研究法の歴史的経緯を踏まえ，質的研究主導型MMRとは何かという問いに応えていく。調査者の哲学的立場（存在論，認識論），ポスト実証主義と解釈主義との関連や，量的研究主導型アプローチとの比較などを，研究事例とパラダイム論争のエピソードから紐解いていく。さらに，最新のMM研究デザインの類型と質的研究主導型MMMRを，豊富な事例を通して説く。この段階で，GTMAが依拠する質的研究主導型MMRの概要をつかむことができた。

いよいよGTMAに迫っていく。まず，シャーマズの「構成主義的グラウンデッドセオリー」について，認識論的・戦略的視点から，客観主義的GTAと比較し，その特徴が描き出される。「構成主義的グラウンデッドセオリー」は，「実証主義とポストモダンの中間に位置する研究戦略」であり，シャーマズは，「存在論的には相対主義的立場を採り，認識論的に主幹主義的立場を採る」こと，そして「ストーリーの書き手」となることを提起している。GTMA（Grounded text mining Approach）は，このような「シャーマズの構成主義的グラウンデッドセオリーがもつ研究対象に向かう姿勢を，テキストマイニング・アプローチに応用したものである」（稲葉・抱井，2011）。

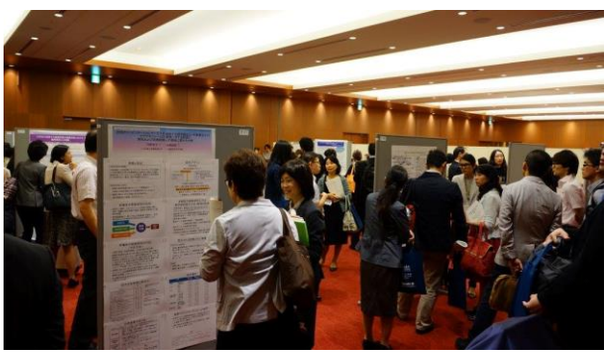
休憩を挟んで，稲葉光行先生による第2部「混合研究法としてのGTMA」が始まった。まず，今回は，PCを用いたワークショップではなくプレゼンテーションとし，実際の手続きは論文を参照してほしいとの説明があった。GTMAが産みだされた稲葉先生の研究ストーリーは，1980年代後半からの情報社会の進展と学習観の転換などと重なり，興味深い内容であった。

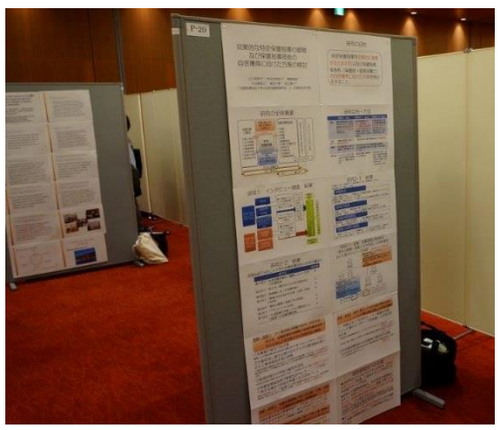
GTMAは，グラウンデッドセオリーアプローチとテキストマイニング手法を組み合わせた「変換型混合デザイン（conversion mixed design）」に基づく分析手法である。まず，テキストマイニングとはどのようなものか，その仕組みを踏まえて，「グラウデッドな」テキストマイニングのアプローチの特徴と分析サイクルなどが提示された。そして，がん告知に関するフォーカス・インタビューの事例による具体的な分析のプロセスと，GTMAの利点と課題が紹介された。

3時間強の講義は，混合研究法の誕生から現在に至る時空を一気に駆け抜け，さらにGTMAの領域に分け入るという，MMRが凝縮された内容であった。紹介のあったMMRのリソースを読み始めたいと思う。ありがとうございました。

報告者：
小高　さほみ
青山学院大学　非常勤講師

ポスターセッション　参加報告





2015年9月19日、国際混合研究法学会アジア地域会議・第一回日本混合研究法学会にて、ポスター発表の機会をいただきました。普段、研究をする中で、定量的な研究にも、定性的な研究にも限界があり、同じ対象に対してもアプローチの方法で見えてくるものが違うということを実感しておりましたので、混合研究法という、定量的研究と定性的研究の強みを併せ持つ手法があり、その学会が行われると聞いて、ぜひとも発表させていただきたいと思って参加させていただきました。

今回の私の発表では、主に定性的な方法で１事例を分析した上で、一時的な尺度得点と比較し、その事例について尺度から見た結果と、事例分析から見た結果を検討するという手法をとりましたが、それらを統合して結論付けるというのは非常に難しかったです。しかし、同時に、混合研究法を自分のものとしてうまく使うことができれば多面的に対象者を描くことができるという混合研究法の奥深さ、興味深さに気づき、更に混合研究法について学んでいきたいという思いが沸き上がってきました。

当日は、クラブツリー先生、抱井先生、亀井先生の基調講演、フェターズ先生も交えたパネルディスカッションから、実際の混合研究法の用い方、考え方についてご教授いただき、改めて自らの研究を今後どのように発展させていけるか考える機会となりました。また、博士論文執筆を控えた私にとっては励まされた言葉も多くありました。

ポスター発表の数も１つの部屋に収まる程度の件数で、同時間帯に行われているプログラムがなかったため、多くの方がポスターを見に来てくださり、研究をよりよくしていくためのアイディアをくださりました。この発表の機会、学会参加で得られた収穫を糧に精進していきたいと思います。この場をお借りして、コメントをくださった皆様、またこの機会を運営いただきました皆様に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

報告者：

二瓶（土井）　裕貴
大阪大学大学院

関連イベントのお知らせ

●混合研究法を用いたケーススタディに関するワークショップ （静岡家庭医養成プログラム）

【日時】:2016年1月16日（土）14:00～17:30
【場所】:掛川市生涯学習センター（JR掛川駅より車5分）
【講師】:Timothy C. Guetterman, PhD (Research Fellow, University of Michigan, Department of Family Medicine)、Michael D. Fetters, MD, MPH, MA (University of Michigan)

【コーディネータ】:井上真智子（浜松医科大学地域家庭医療学講座、静岡家庭医養成プログラム）

詳細は下記を参照ください。

http://www.shizuoka-fm.org/menu5/?mode=detail&article=14

●量的研究と質的研究の研究デザインと質的研究の手法ワークショップ

【日程】:2016年3月4-5日
【場所】:東京大学　本郷キャンパス　医学部館
【講師】:Joel Gittelsohn　（ジョンズ・ホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生大学院・教授）
【主催】:混合研究法ワークショップ実行委員会

ジョンズ・ホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生大学院のジョエル・ギテルソン先生（人類学 PhD）を講師として国内に招き、量的研究と質的研究の両方を含めた研究デザインについて学ぶこと、さらに質的分析法の理論を学び、ヒトを対象にした調査・研究についての更なる理解に役立てることを目的にワークショップを開催いたします。これを機に量的研究と質的研究の両方のデザインを活用し、課題への理解を深めましょう。

【コーディネータ】:　山口美輪（徳島大学大学院医歯薬学研究部　予防医学　助教）
桐谷麻美（カロリンスカ研究所　研究員）
メール:160304jgworkshop@googlegroups.com

詳細は下記を参照ください。

http://www.jsmmr.org/news/ws20160304

国際混合研究法学会からのお知らせ

●第2回国際混合研究法学会（MMIRA）

【日程】:2016年8月3-5日
【場所】:英国・ダーラム大学
【大会テーマ】:Moving Beyond the Linear Model: The Role of Mixed Methods Research in an Age of Complexity（線形モデルを超えて:複雑性の時代における混合研究法の役割）

詳細は下記を参照ください。

https://www.dur.ac.uk/sass/events/events/mmira2016/

●第2回国際混合研究法学会トラベル・アワード（MMIRA旅費賞）

2016年に英国で開催される第２回国際混合研究法学会への旅費賞についてのお知らせです。2016年は、下記３つの部門に対し各１名が受賞します。

詳細は下記のMMIRAからの案内を参照ください。

MMIRA 2016 International Conference Travel Award

The Mixed Methods International Research Association (MMIRA) welcomes applications for the MMIRA 2016 International Conference Travel Award. This award is designed to bring together diverse communities by providing access to MMIRA international conferences for student members and regular members from developing nations (countries defined by the World Bank as low or medium income, see http://data.worldbank.org/about/country-and-lending-groups or the list on the MMIRA membership page).

Three types of awards will be granted in 2016 with one successful recipient from each of the following categories:

Graduate Student Member
Member from Developing Nations
Graduate Student Members from Developing Nations

Each award recipient will receive recognition from MMIRA in the form of a certificate, a $1,000 honorarium, and a waiver of the International Conference registration fee. Awardees are expected to present at a special session at the 2016 International Conference and to be present at the business meeting to receive the award. Awardees must also grant permission for MMIRA to use their application information to create a profile to be featured on the MMIRA website and social media.

●第2回国際混合研究法学会トラベル・アワード（MMIRA旅費賞） つづき

To be considered for the 2016 MMIRA International Conference Travel Award, applicants must meet the following criteria:

Graduate student members:

Must be a current MMIRA student member who is enrolled part-time or full-time in a post-graduate program at a degree-granting institution at the time of application.

Regular members from developing nations:

Must be a current MMIRA member who lives and works in a developing nation (as defined above).

Graduate student members from developing nations:

Must be a current MMIRA student member who is enrolled part-time or full-time in a post-graduate program at a degree-granting institution at the time of application *and* who is a citizen of, and lives and works in, a developing nation (as defined above).

Applications must be addressed to the MMIRA International Conference Travel Award Committee Chair and emailed to mmira.awards@gmail.com by February 15, 2016, preferably as a Word or pdf attachment. Please put "2016 International Conference Travel Award" in the email subject line.

The application must include the following:

The particular travel award category under which the application is being made.

Demographic information including:

Contact information (name, institution/organization, email, phone, mailing address)

Evidence of developing country status.

For all categories: Brief description of the following:

Relevance of contribution of your work to field of mixed methods (max. 200 words)

Current mixed methods research pursuits/experiences/training (max. 200 words)

What you expect to gain from the International Conference (max. 200 words)

Other funding available and efforts to secure it (max. 200 words)

Budget for attending the conference (max. 200 words)

For student applicants: Letter of support filled out by primary supervisor (or alternate committee member) with directions to provide an assessment of the applicant's:

potential of contribution to field of mixed methods

availability of alternative conference funding

need for access to the mixed methods community

merit of the applicant

proof of student status at the time of application.

Award recipients will be notified via email by April 1, 2016. Once the award is accepted by the member, the MMIRA will announce the award recipients on the MMIRA website and MMIRA social media platforms (Facebook and Twitter).

●国際混合研究法学会ディサテーション・アワード（MMIRA博士論文賞）

2016年博士論文賞についてお知らせします。
詳細は下記を参照ください。

MMIRA 2016 Dissertation Award

The Mixed Methods International Research Association (MMIRA) welcomes applications for the MMIRA 2016 Dissertation Award. This award recognizes a beginning scholar whose dissertation has made an outstanding contribution to the field of mixed methods research. The award recipient will receive recognition from MMIRA in the form of a $1,000 honorarium and a waiver of the International Conference registration fee.

The award will be presented at the business meeting during the 2016 MMIRA International Conference in Durham. UK. The awardee is strongly encouraged to attend the conference and make a presentation on the topic of the dissertation. In addition, two other individuals, whose dissertations will receive the second and third places, will receive Honorable Mentions and a waiver of the International Conference registration fee.

To be considered for the 2016 MMIRA Dissertation Award, the dissertation must have been defended during the period of November 2013 – November 2015. The applicant must be a current MMIRA member at the time of application and award.

Applications must be addressed to the MMIRA Dissertation Award Committee Chair and emailed to mmira.awards@gmail.com during November 15 – January 15, 2016, preferably as a Word or pdf attachment. Please put “Dissertation Award Application” in the email subject line.

The application must include the following:
Demographic information including:
- Contact information (name, email, phone, mailing address)
- Dissertation title and name of institution, Faculty/Department that the dissertation was completed as a component of PhD and the date of defense/approval
- Supervisor(s) (name(s), institution/organization, Faculty/Department, email, phone, mailing address).

Brief description of study including:
- major dissertation research components (its purpose, research question(s), design, data collection, analysis and integration procedures, key findings, discussion, and implications) (max. 500 words)
- contribution of this dissertation research to the field of mixed methods and why this dissertation should be considered for this award (max. 200 words)
- strengths and limitations of the methodological approach and why this dissertation research can be considered of high quality (max. 200 words)
- significance of findings and the impact of this dissertation research on theory and practice of mixed methods research (max. 200 words).

Letter of support completed by the primary supervisor/committee chair (or designated alternate) providing an assessment of the applicant’s dissertation research with the focus on:
- potential of contribution to field of mixed methods
- strengths and limitations of the study
- significance of the findings.

A pdf copy of the dissertation.

Award recipients will be notified via email by April 1, 2016. Once the award is accepted by the member, the MMIRA will announce the award recipients on the MMIRA website and MMIRA social media platforms (Facebook and Twitter).

おすすめ書籍

『混合研究法入門－質と量の統合のアート』

新刊

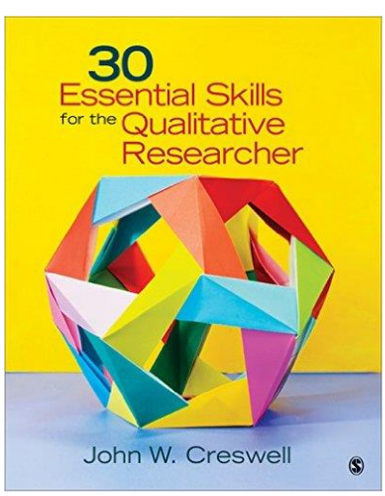
抱井　尚子　著

質的研究と量的研究という区分を超える第三の流れとして、いま混合研究法が社会科学・健康科学を中心に注目されている。本書は日本語による初めてのオリジナルの入門書として、その概要と歴史的な発展をおさえつつ、複雑かつ多岐にわたる混合研究法の研究プロセス・研究デザインを、実際の研究事例をまじえながらわかりやすく解説し、混合研究法の意義とこれからの展望を示す。コンパクトな形にまとめ、混合研究法のAtoZがスムーズにつかめる一冊。

138頁　本体（2,000円）＋税
医学書院より2015年12月出版

『30 Essential Skills for the Qualitative Researcher』（英語）

既刊



John W. Creswell　著

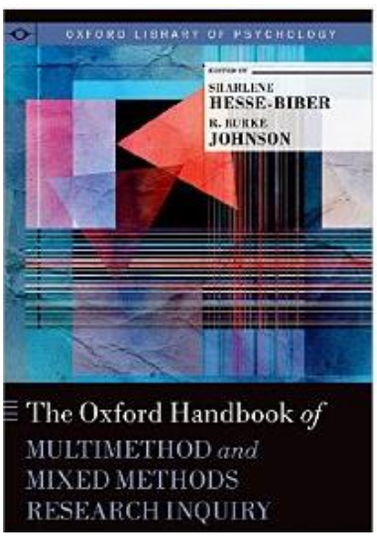
本書は、質的研究を行うために必要なスキルを、研究を進める段階に沿って解説したもので、実践的で分かりやすい一冊である。著者のクレスウェルが、担当する質的研究入門講義のための教科書として著した書であることもあり、大学院生の教科書としても適している。

312頁・6,407円より（アマゾン・ジャパン参考価格）
SAGE Publicationsより2015年出版

おすすめ書籍

既刊

『The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry (Oxford Library of Psychology)』（英語）



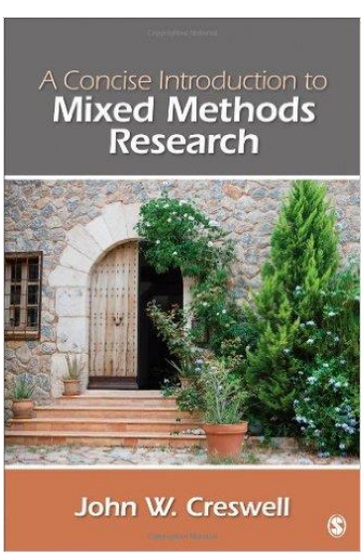
Sharlene Hasse-Biber & Burke Johnson　編集

本書は40の論文を収めたハンドブックである。Creswell、Bazeley、Fetters、Onwuegbuzie、Hitchcock他、数十名の国際的に著名な混合研究法研究者らが寄稿している。混合研究における理論と方法論のリンクについて、混合研究の実施について、および混合研究法の今後の方向性を含む４パートから成る。776頁にも渡る読み応えある一冊である。

776頁　22,667円より（アマゾン・ジャパン参考価格）
Oxford University Pressより2015年出版

既刊

『A Concise Introduction to Mixed Methods Research 』(英語)



John W. Creswell　著

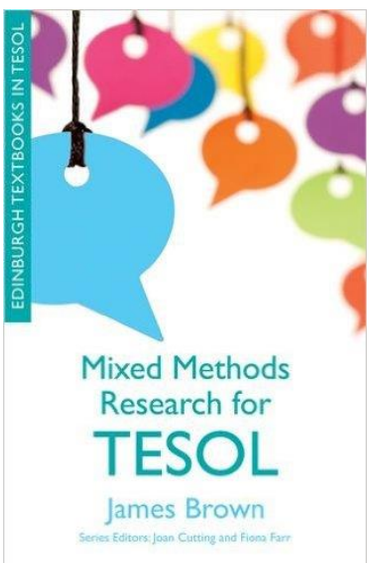
混合研究法のコンパクトな入門書である。分かりやすい言葉で解説がされているいために、読者の理解度が高く、そのため大学院生の教科書にも適した一冊である。質的研究と量的研究とのパラダイム論争等の複雑な背景に深く言及することもなく、混合研究初心者には戸惑いなく読める内容。

132頁　3,200円より（アマゾン・ジャパン参考価格）
SAGE Publicationsより2015年出版

おすすめ書籍

『Mixed Methods Research for TESOL (Edinburgh Textbooks in TESOL) 』(英語)

既刊



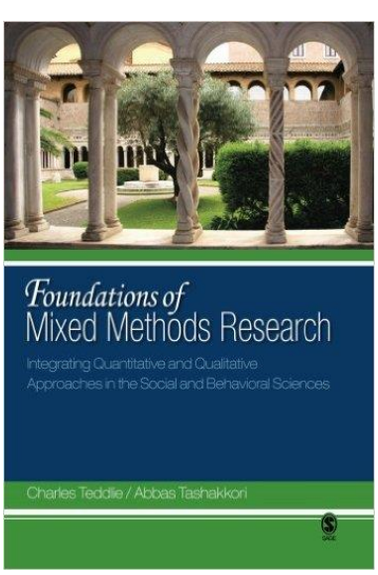
James Dean Brown　著

本書は英語教授法（TESOL）研究者のための入門書である。研究プロジェクトの設定から、データ収集とコーディング、量的データ分析、質的データ分析、MMRデータ分析、分析結果報告、論文執筆と、研究開始から終了までのプロセスに沿って本書は進む。加えて、アクション・リサーチ、コーパス調査、統計調査、質問紙調査、テスト調査、プログラム評価等を、混合研究法と関連させながら解説している。

288頁　3,823円より（アマゾン・ジャパン参考価格）
Edinburgh University Pressより2014年出版

『A Concise Introduction to Mixed Methods Research 』(英語)

既刊



Charles Teddlie & Abbas Tashakkori　著

本書はMixed Methods Researchに関する基本的な用語の整理、科学哲学的な背景、戦略的なデザイン設計など、MMRを行う学生や研究者にとって必要な知識が体系立てられて書かれている。随所で量的研究-Mixed Methods-質的研究の特徴が対比されており、どちらの背景を持つ研究者にとっても読みやすい内容となっている。

386頁　8,374円より（アマゾン・ジャパン参考価格）
SAGE Publicationsより2009年出版

おすすめ論文

「セクシャルヘルスの診察手技に関する教育についての日本における文化的コンテクスト – 静岡家庭医養成プログラム研修医への模擬患者インストラクターによる教育評価の事例混合研究」（英語）

Asia Pacific Family Medicine 14:8 (2015)

著者
Michael S. Chu, Ayaka Yajima, Eric P. Skye, Kiyoshi Sano, Machiko Inoue, Tsukasa Tsuda and Michael D. Fetters

背景・状況
家庭医療がプライマリ・ケアの基盤となっている欧米諸国と違い、日本では専門分野としての家庭医療はまだ発展途上にある。特にセクシュアルヘルスにまつわる医療など、家庭医療が得意とする領域の医療サービスの多くがまだ日本の家庭医療研修プログラムでは導入されていない。このギャップが原因で癌予防、診断および治療など、セクシュアルヘルスにまつわるケアを提供する機会が逃されている。本事例混合研究では、日本の家庭医療レジデントが女性の乳房診察・内診及び男性の生殖器と前立腺診察について模擬患者インストラクター（SPI）より指導を受けるプログラムの効果と受け入れの可能性について探究した。

事例概要
米国ミシガン大学と日本静岡家庭医養成プログラムの提携プログラムの一環として、日本人レジデントがミシガン大学でSPIによる女性の乳房診察と内診及び男性の生殖器と前立腺診察手法の指導を受けた。指導後のフィードバック、半構造化インタビューとオンラインアンケート調査を通してレジデント、指導者、スタッフを対象とした事例混合研究を行った。

議論・評価
レジデントとSPIの指導に対する評価は全般的に好意的であり、SPIセッションがレジデントの知識、自信および技能に好影響を与えたことを観察できた。米国人SPIにとっては、通訳者の位置や通訳者を使うタイミングなど、指導に関する具体的な説明が特に有意義であることがわかった。SPIを通してレジデントは患者の観点を知り、新しく学んだ技能を練習する貴重な機会を得た。性差医療を提供する際、患者と同性の医師があたった方が良いという意見や、日本に帰国してから習得した技能を練習する機会が少ないなどの意見が寄せられた。レジデントやスタッフは文化的な理由から、同様の研修プログラムを日本で実施するのは難しいと考えていることがわかった。

結論
SPIプログラムは好評だったが、十分な練習と監督がない限り、レジデントが当プログラムを通して習得した技能を十分に保持することができない可能性が示唆された。日本でSPIによるセクシュアルヘルスの研修プログラムを実施することに関しては、性差医療に関する根深いタブー意識が障壁となっているようである。日本で同様の研修プログラムを実施できる可能性はまだ不確かである。これらの障壁をよりよく理解し、どのように克服できるかを探究するためにはさらなる研究が必要である。

第2回日本混合研究法学会年次大会開催のお知らせ

【開催日程】
２０１６年８月２７日（土）-２８日（日）。東邦大学にて開催します。詳細は決まり次第お知らせします。
【演題募集】口頭発表とポスター発表の演題を募集します。募集開始は４月１日、募集締切は５月１日です。詳細は決まり次第お知らせします。
【募集】
大会実行委員・ボランティアを募集します。ご興味のある方は、下記事務局メールアドレスまでご連絡ください。

事務局Email: jsmmr.adm@gmail.com

事務局からのお知らせ

【会費について】
会計年度は4月～翌年3月です。まだ年会費の納入がお済みでない方は1月12日（火）までにお願いいたします。
【会員情報】
ご勤務先、住所、メールアドレスなどの変更がある方は、事務局までメールでご連絡ください。
【メーリングリスト】
会員向けメーリングリストで案内を希望されるイベント（ワークショップや研究会など）がありましたら、ご連絡ください。

事務局Email: jsmmr.adm@gmail.com

編集後記

日本混合研究法学会ニュースレターの記念すべき第１号を発行することができました。ここに執筆してくださった会員および理事の皆様のご協力に感謝して、お礼申し上げます。
第２号は６ヵ月後の発行予定です。セミナーやワークショップの参加報告、および書籍や論文紹介も掲載し、会員の皆様との情報共有の場にしていきたいと思います。つきましては皆様からの情報・記事を下記事務局のメールアドレスにて随時受け付けております。ご協力をお願い申し上げます。

事務局Email: jsmmr.adm@gmail.com

ニュースレター委員：田島千裕

【発行者】日本混合研究法学会
【理事長】抱井　尚子・青山学院大学
【副理事】尾島　俊之・浜松医科大学
【理事】
八田　太一・京都大学
稲葉　光行・立命館大学
井上　真智子・浜松医科大学
亀井　智子・聖路加国際大学
香曽我部　琢・宮城教育大学
成田　慶一・京都大学
野崎　真奈美・東邦大学
田島　千裕・恵泉女学園大学

【事務局】
香曽我部　琢・宮城教育大学